

ネット社会という船に乗って

「すごい」が価値を持つ時代は終わった

文 佐渡島庸平

text by Yohsei Sadoshima

学生時代、クラスでモテる人はどんな人だったか？大学を選ぶ時、就職先を選ぶ時、僕たちはどんな風にして選んできたか？

ずっと「すごい」を基準に選んできたのではなかったか？今までの時代、知識、技術を他の人よりもたくさん持っている「すごい」人が評価されてきた。国家資格である弁護士や医者になれば、どのような人柄であっても、それなりの収入が保証されていた。知識や技術があることが価値と見なされていたからだ。

今、医学部の試験が、昔よりもずっと難しくなっている。どんな私立大の医学部であっても東大の理科一類と同等の偏差値になってしまっていて、お金さえあればなんとかねじ込める医学部といったものはなくなってしまった。医学部専門の予備校もできていくくらいだ。それくらい、医者という職業は、憧れの的になり続けている。

しかし、試験ができるということは、必要な知識や技術がすでに整理されているということだ。整理されている知識や技術の習得は、もはやAIとロボットの方が早い時代になってきている。あとは、ロボットに習得させるのと、人に習得させるの、どちらのコストが安いのかという問題だけだ。残念ながら、まだ人の方が安い。そのおかげで人に仕事があるけど、時間の問題だ。

では、人には、どんなことが期待されるようになってきているのだろうか？そのことは、人気ユーザーをみているとわかる。「面白い」人だ。助けたくなる、応援したくなる「欠点」のある人だ。面白い人は、結果はどうでもいい。過程が目される。以前は、過程を共有するコストが高かった。だから、出来上がった結果（作品）のみが、流通した。

今は、全てのデータがクラウドに保存される。そして、出来上がった過程をタラタラと映している動画や写真は、アプリなどでアマでもプロ風に演出できるようにになっている。

「すごい」が価値を持つ時代は終わった。「すごい」は、もはや、ロボットやAIで代替できるといふことを意味しているにすぎない。

人はどんな暇になっていく。もっとも楽しい遊びは、「人助け」だ。人助けを気持ちよくさせてくれる人が人気者になっている。欠点や苦手なことをうまくさらけ出して、どうやって助けられたいのか、分かりやすく求めている人が、SNS時代の人気者だ。

ユーザーは大したことがない。実力がないからいざれ消えていく。そんな風に言っている人たちがいた。そう、ユーザーは大したことはない。大したことがない様子を毎日流しているから、何をどう応援したらいいのかは、視聴者に伝わった。すごいことが、ユーザーの魅力だったのだ。「すごさ」を軸に世の中を見ている人には、今の時代の変化が全く理解できないはずだ。マスマディアの価値観では、広がるはずのない、低レベルのものが、世の中で人気を得ている。文化レベルが下がってしまったかのように感じる。

しかし、価値基準が全て変わってしまったのだ。親の古い価値基準で医学部へ行ってしまう学生は、いつまで経っても時代の価値観の変化に気づくことができない。「すごい」なってしまうように、常に自分をリセットして、新しいことに挑戦し続ける。リセットする勇氣を持っているかどうか、今の時代のクリエイターには問われている。

Profile

株式会社コルク 代表取締役  
2002年講談社入社。週刊モーニング編集部にて、「ドラゴン桜」(三田紀房)、「働きマン」(安野モヨコ)、「宇宙兄弟」(小山宙哉)などの編集を担当する。2012年講談社退社後、クリエイターのエージェント会社、コルクを創業。著名作家陣とエージェント契約を結び、作品編集、著作権管理、ファンコミュニティ形成・運営などを行う。従来の出版流通の形の先にあるインターネット時代のエンターテインメントのモデル構築を目指している。

